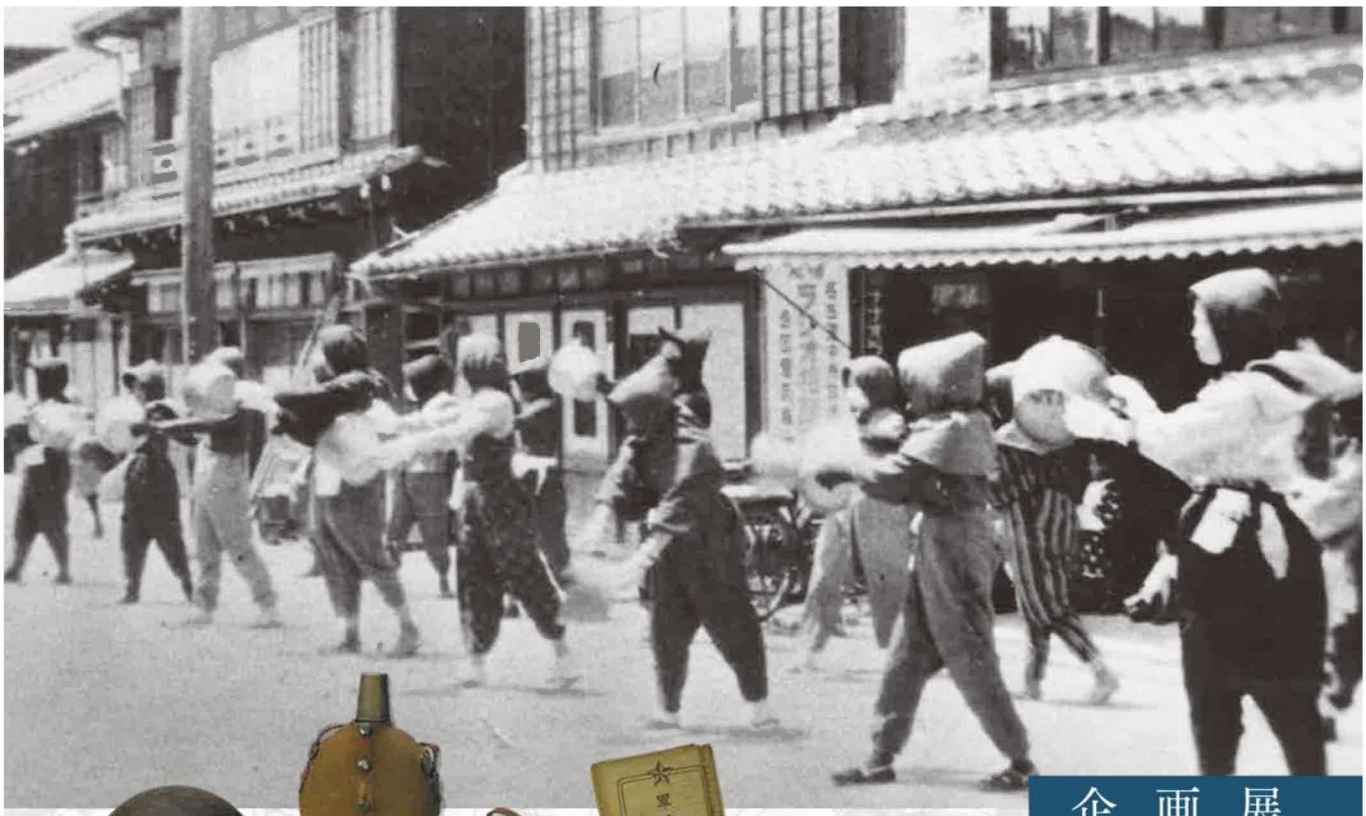


企画展

終戦80年

半田の戦争記録

令和7年

6.21[土]▸**8.31**[日]

開館時間 10:00～18:00

休館日 6/23(月)・30(月)・7/7(月)・14(月)・22(火)・28(月)・8/4(月)・12(火)・18(月)・25(月)

半田市立博物館 〒475-0928
愛知県半田市桐ヶ丘4丁目209番地の1
TEL(0569)23-7173

1. 戦争体制へ

半田市が誕生した昭和12年（1937年）10月は、日中戦争が始まったばかりで国内が戦争体制一色となった時期でもあり、日中戦争のひろがりとともに国民の総動員体制が確立されていきました。

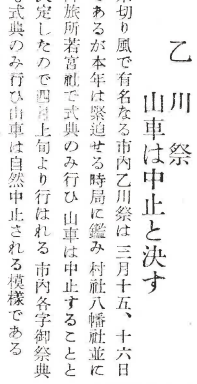
昭和13年（1938年）に国家総動員法が公布され、国民経済・生活が全面的に国の統制下に置かれ、国民や物資が戦争のために使われるようになりました。さらに、この法律にもとづき国民徴用令が公布され、軍需工場などで強制的に働かされることになりました。

昭和15年（1940年）には政党が解散し、大政翼賛会が結成されました。半田市でも、昭和16年（1941年）に大政翼賛会半田支部が設置され、さらに、昭和17年（1942年）5月には、愛国婦人会と大日本国防婦人会の半田市支部が解散統合して大日本婦人会半田支部が結成されました。これにより、婦人の動員体制が一元化され、戦死者の家族の手助けを中心に活発な活動を行っていくようになりました。

大政翼賛会半田支部結成（昭和16年）

大政翼賛会半田支部の推進員辞令交付（昭和16年）

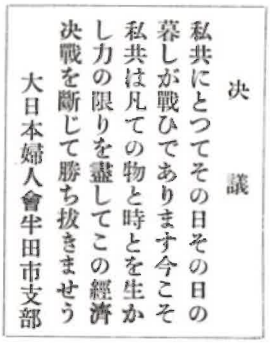
大日本婦人会半田支部結成（昭和17年）



乙川祭
山車は中止と決す

糸切り風で有名なる市内乙川祭は三月十五、十六日であるが本年は緊迫せる時局に鑑み村社八幡社並に御旅所若宮社で式典のみ行ひ山車は中止することと決定したので四月上旬より行はれる市内各字御祭典も式典のみ行ひ山車は自然中止される模様である

半田市公報 第64号（昭和20年）



決議

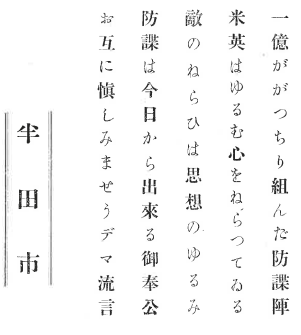
私共にとつてその日その日の暮しが戰ひであります今こそ私共は凡ての物と時とを生かし力の限りを盡してこの經濟決戰を斷じて勝ち拔きませう

大日本婦人會半田市支部

半田市公報 第46号（昭和18年）

空襲に備えたバケツリレーの消火訓練（昭和19年頃）

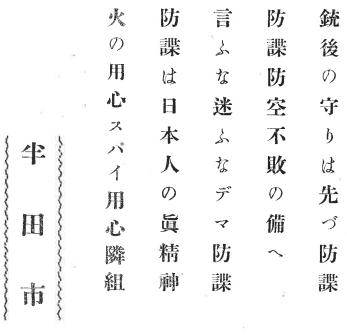
半田市公報に掲載された標語（スローガン）



一億ががつちり組んだ防諜陣
米英はゆるむ心をねらつてゐる
敵のねらひは思想のゆるみ
防諜は今日から出來る御奉公
お互に愼しみませうデマ流言

半田市

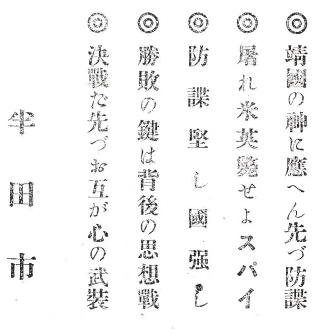
半田市公報 第48号（昭和18年）



銃後の守りは先づ防諜
防諜防空不敗の備へ
言ふな迷ふなデマ防諜
防諜は日本人の眞精神
火の用心スパイ用心隣組

半田市

半田市公報 第49号（昭和18年）



◎靖國の神に應へん先づ防諜
◎屠れ米英鬼畜せよスパイ
◎防諜堅し國強し
◎勝敗の鍵は背後の思想戰
◎決戰は先づお互が心の武裝

半田市

半田市公報 第54号（昭和18年）

2. 戦争と市民生活

戦争が進むにつれ、民間による様々な物や商品のほぼ全ての生産が軍のために変えられていきました。そして、次第に物の不足が深刻となり、物資の取り締まりと配給制度が行われるようになりました。配給制は日用品のほぼ全てに広げられ、『ぜいたくは敵だ』『足らぬ足らぬは工夫が足らぬ』『欲しがりません勝つまでは』などの標語が広まりました。

半田は農家が少なく食料事情が極めて悪かったため、空き地や校庭、公園などが畑に変えられ、さつま芋などの作物が作られました。また、戦争の費用を生み出すために貯蓄を勧める運動や国債を買う運動、その他いろいろな献金運動が繰り返し行われました。軍事資材の不足を補うために、家庭や寺院などにある金属類を集める運動も行われました。こうした中、航空機の不足に対して大政翼賛会半田支部が国に飛行機を献納することを提案し、半田市から「半田市民号」3機が献納されました。しかし、このような市民の努力と苦労も空しく、戦況はますます悪化していきました。

2月分家庭用砂糖配給について（昭和17年）

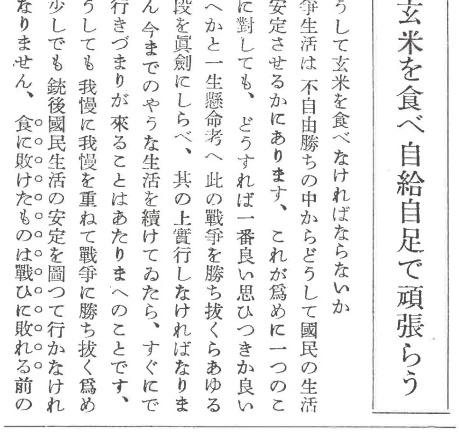
戦時貯蓄債券（昭和17年）

貯蓄を呼びかけるブラスバンドの行進（昭和18年）

配給物資関係　町内会隣組回報　　『半田市公報　第41号』（昭和18年）より抜粋

配給品名	購入資格	数　量
豆類特配	一般家庭用	1世帯2合
12月分木炭	同	1世帯1俵（4貫目）
石　鹸	2人マデノ世帯	洗顔1ケ、洗濯1ケ
	3人ヨリ6人迄	洗顔2ケ、洗濯1ケ
	7人ヨリ10人迄	洗顔3ケ、洗濯2ケ
	11人以上世帯	洗顔4ケ、洗濯4ケ
鰹　節	一般家庭用	4人迄ノ世帯小ブシ1本
		5人以上世帯大ブシ1本
鶏　卵	3人マデノ世帯	3個
	4人ヨリ6人迄世帯	6個
	7人ヨリ10人迄世帯	10個
	11人以上ノ世帯	12個
パ　ン	一般家庭用	1人に付1個
マッチ	同	並型　　1包
		家庭小型　1箱
		家庭大型　1箱

半田市公報　第48号（昭和18年）


玄米を食べ自給自足で頑張らう

どうして玄米を食べなければならないか

戰爭生活は不自由勝ちの中からどうして國民の生活を安定させるかにあります、これが爲めに一つのことに對しても、どうすれば一番良い思ひつきか良い考へかと一生懸命考へ此の戰爭を勝ち拔くらあゆる手段を眞劍にしらべ、其の上實行しなければなりません今までのやうな生活を續けてゐたら、すぐにでも行きづまりが來ることはあたりまへのことです、どうしても我慢に我慢を重ねて戰爭に勝ち拔く爲めに少しでも銃後國民生活の安定を圖つて行かなければなりません、食に敗けたものは戰ひに敗れる前の

半田市公報　第42号（昭和18年）

3. 戦時下の教育

大正から昭和の初めにかけて、日本は戦争や不景気などの重大な出来事にぶつかり、教育におけるさまざまな分野で、次第に軍国主義的色合いが強まっていきました。

昭和16年（1941年）の国民学校令により、市内の小学校は国民学校と名を改めます。国民学校では、これまでの尋常科が初等科と名を変え、初等科6年、高等科2年の計8年間が義務教育となりました。

国民学校初等科では、国民科（修身・国語・国史・地理）、理数科（算数・理科）、鍛練科（武道・体操）、芸能科（音楽・工作・家事裁縫）が教えられ、高等科ではさらに実業科（商業・農耕）が加わりました。

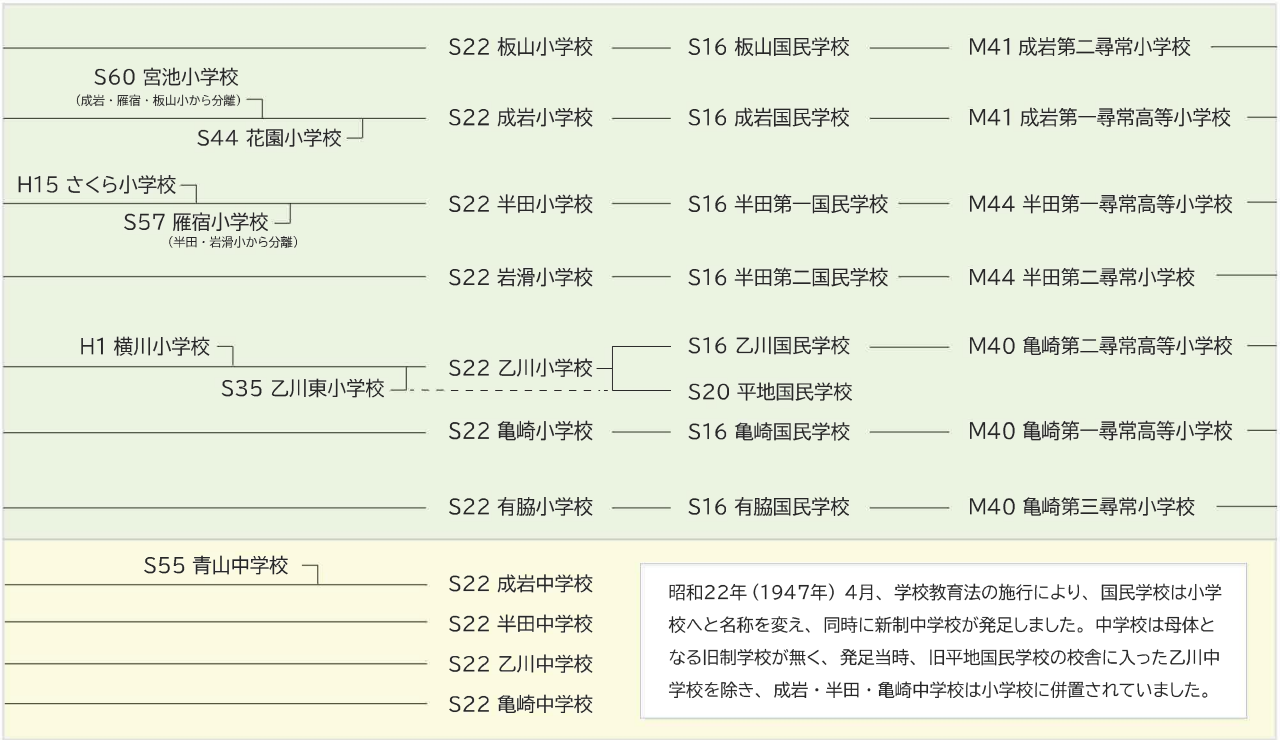
この国民学校では、戦時下の子どもたちを育成する目的で、特に武道訓練と団体訓練に重点を置いた教育活動が日々行われていました。しかし、やがて戦争が激しくなると、勤労奉仕という名のもとに、子どもたちも畑を耕したり、工場で働いたりするようになりました。

夏休みの宿題で軍へ献納するための草刈り（昭和16年頃）
提供：半田市立岩滑小学校

仲田池にて軍馬用干し草の刈り取り作業（昭和16年）
提供：半田市立成岩小学校

半田市における小中学校の移り変わり

『郷土読本　はんだ』に加筆

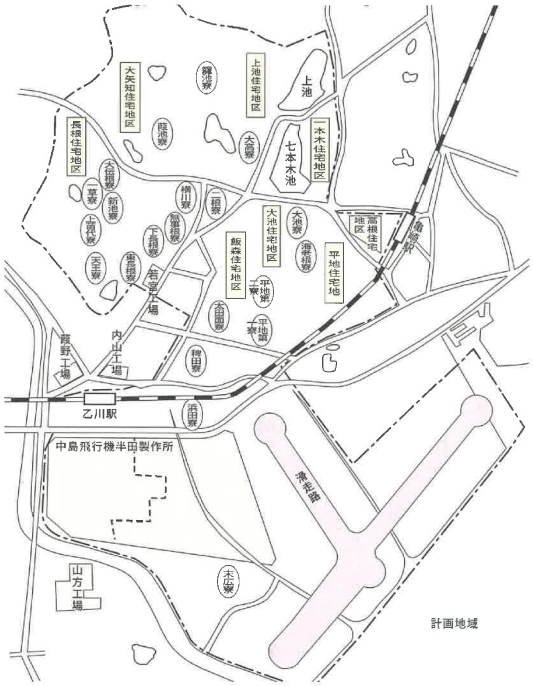


昭和22年（1947年）4月、学校教育法の施行により、国民学校は小学校へと名称を変え、同時に新制中学校が発足しました。中学校は母体となる旧制学校が無く、発足当時、旧平地国民学校の校舎に入った乙川中学校を除き、成岩・半田・亀崎中学校は小学校に併置されていました。

4. 中島飛行機の進出

昭和15年（1940年）、衣ヶ浦総合港湾計画が国の計画に組み込まれることが決まり、衣ヶ浦臨海工業地帯が造られることになりました。まず、昭和17年（1942年）に日本碍子株式会社が成岩に工場を建設し、続いて同年8月には、中島飛行機半田製作所も工場建設を始め、さらに川崎重工株式会社が誘致されました。

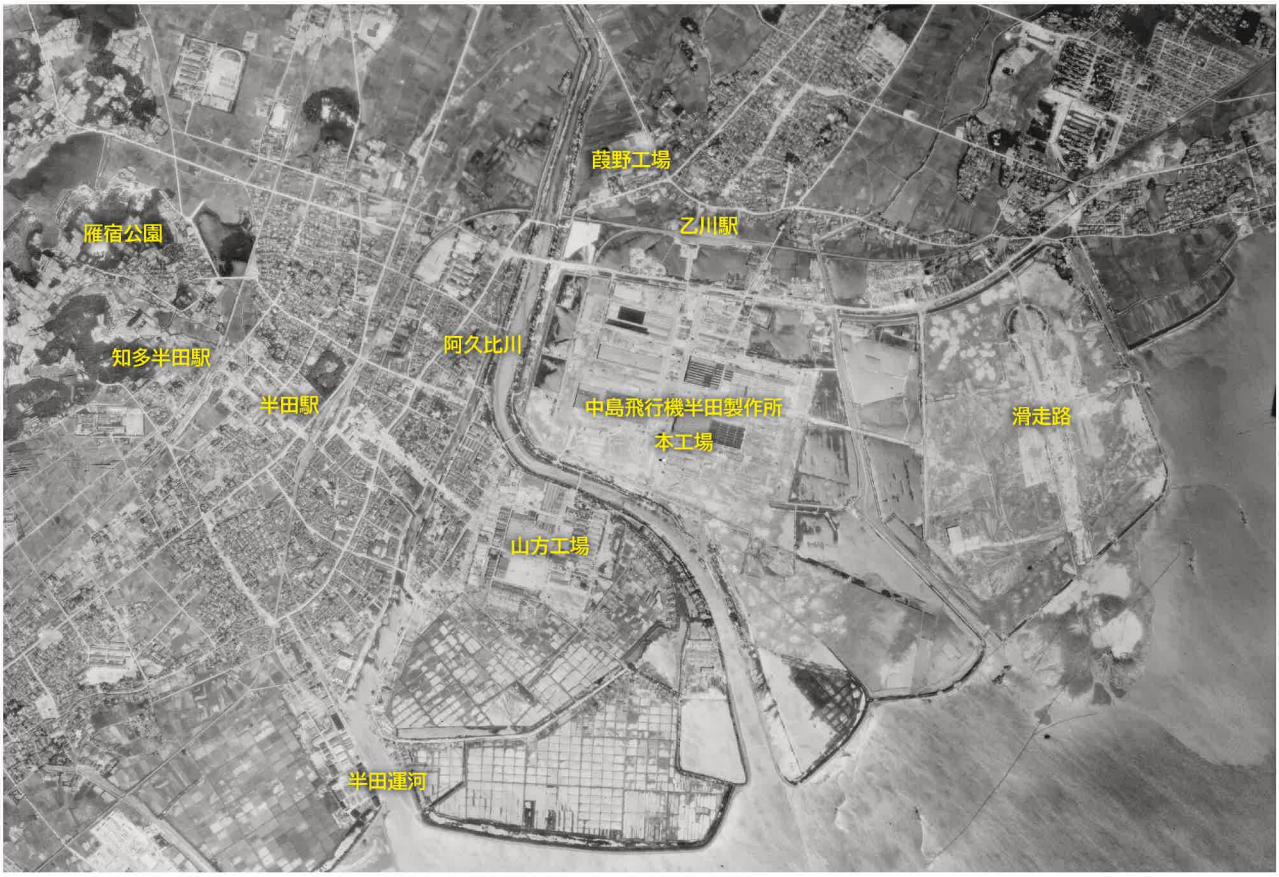
中島飛行機半田製作所の工場用地は、阿久比町横松の山を削った土で、乙川の耕地を埋め立てて造成されました。約380万㎡もの広大な敷地に複数の工場や倉庫のほか、2本の滑走路などが建設される計画でした。さらに、旧市街地を除く乙川地区一帯と亀崎地区の一部（約541万㎡）を対象とする都市計画も立てられました。しかし、組立工場と滑走路の建設が最優先とされ、その後も一貫して機体の生産実績が優先されたため、工場の建設はあまり進みませんでした。その結果、敗戦時までに建設された工場は、最終的に計画の約46％、滑走路は当初の計画より短い約1,000mの1本が造られただけでした。



中島飛行機半田製作所都市計画図
『郷土読本　はんだ』より

米軍偵察機による航空写真（昭和20年7月5日撮影）

米国公文書館所蔵／提供：（一財）日本地図センター



5. 中島飛行機半田製作所

中島飛行機半田製作所の航空機生産は、工場建設と競争するようにして始められ、昭和18年（1943年）1月に艦上攻撃機「天山」の第1号機が完成、同年8月からは艦上偵察機「彩雲」の生産が開始されました。本工場では部品を集めて胴体や翼を組み立て、5号棟で「天山」、6号棟で「彩雲」の全体組み立てが行われました。終戦までの間に「天山」970機、「彩雲」387機が生産されました。「一刻も早く、一機でも多く」という状況のなか、生産体制は月ごとに強化されていきました。それを支えたのは、国家総動員法にもとづき強制的に働かされた男子工員や学徒、女子工員、朝鮮半島から動員された人々でした。

半田製作所の生産は昭和19年（1944年）頃から急速に増加し、同年10月には月産100機体制を確立しました。しかし、12月に発生した昭和東南海地震による被害に加え、工場疎開の進展や空襲の激化、深刻な部品不足等により、昭和20年（1945年）4月以降、生産体制は急速に低下していきました。

中島飛行機半田製作所内の様子

艦上攻撃機「天山」

艦上偵察機「彩雲」

中島飛行機半田製作所の飛行場滑走路跡（半田市中午町）

滑走路付近には、空襲による穴が点在している。（昭和23年撮影）

滑走路跡は、主に道路として利用されている。（平成19年撮影）

滑走路跡の道路（令和2年撮影）

滑走路末端部跡の側溝（令和2年撮影）

6. 学徒動員

中島飛行機半田製作所の従業員数は、最大で約26,000名にのぼりました。そのうち、約17,000名は国家総動員法にもとづき強制的に動員された徴用工、動員学徒、女子挺身隊などでした。

戦争の激化とともに動員される学徒の年齢が下がっていき、昭和20年（1945年）には、満12歳以上の全生徒が農村や工場に動員されることになりました。中島飛行機半田製作所でも、全国各地から旧制中学生、女学生が動員され、飛行機の胴体や翼の組み立てなどを行いました。学徒たちは、仮小屋の寮で粗末な薄い布団や濁った水に悩まされ、常に空腹に苦しめられていました。

昭和19年（1944年）からは、朝鮮にも徴用令が適用されました。朝鮮半島から動員された人々は日本語の話せない人も多く、彼らに対して様々な差別が行われました。一方で、同じ世代の学徒・女子挺身隊員・青年労働者たちの間で友情を育んだという心温まるエピソードも多くありました。

甲府高女学徒（中島飛行機半田製作所葭野工場にて）
提供：半田空襲と戦争を記録する会

鹿児島県立川内中学校卒業記念写真（半田市苗代寮前）
提供：半田空襲と戦争を記録する会

中島飛行機半田製作所への学徒派遣校

『半田の戦争記録　第三集』より

愛知県	名古屋工業専門学校（人数不明）、半田中学校（810 人）、半田商業学校（460 人）、半田高等女学校（600 人）、半田家政女学校（120 人）、横須賀高等女学校（500 人）、豊橋高等女学校（300 人）、豊橋家政女学校（260 人）、松操高等女学校（170 人）、愛知実修高等女学校（150 人）、名商実践高等女学校（150 人）、桜花女子商業（130 人）、中京実業女学校（140 人）、名古屋第一工業（50人）、半田第一国民学校（340 人）、乙川国民学校（340 人）、亀崎国民学校（220 人）、成岩国民学校（170 人）、阿久比第一国民学校（50人）、阿久比第二国民学校（50人）、阿久比第四国民学校（70人）、片葩国民学校（120 人）、大府国民学校（150 人）、横須賀国民学校（250 人）、岡田国民学校（50人）
岐阜県	岐阜師範女子部（120 人）、岐阜青年師範女子部（40人）
三重県	神宮皇学館（40人）
静岡県	浜松工業専門学校（80人）、浜松臨時教員養成所（人数不明）
福井県	福井工業専門学校（70人）、福井商業学校（180 人）、敦賀商業学校（160 人）
東京都	中央工業専門学校（180 人）、研数専門学校（290 人）法政航空専門学校（22人）
山梨県	日川中学校（150 人）、韮崎中学校（120 人）、身延中学校（80人）、祖山中学校（5人）、甲府商業学校（140 人）、甲府高等女学校（50人）、都留高等女学校（45人）、巨摩高等女学校（50人）栄和高等女学校（100 人）
京都府	京都第三中学校（750 人）、烏丸商業学校（300 人）、園部中学校（200 人）
香川県	高松経済専門学校（60人）、香川師範男子部（180 人）、香川師範女子部（360 人）、観音寺商業学校（200 人）、三豊中学校（124 人）、尽誠学園（300 人）
徳島県	徳島師範女子部（250 人）、池田中学校（150 人）、撫養中学校（140 人）
愛媛県	三島中学校（100 人）、子安中学校（200 人）
高知県	高知師範女子部（138 人）、高知青年師範女子部（35人）、高知市立商業（100 人）、城東商業（110 人）
鹿児島県	鹿児島第一中学校（400 人）、鹿児島第二中学校（289 人）、鹿児島市立中学校（219 人）、私立鹿児島中学校（380 人）、川内中学校（201 人）

7. 軍需産業への転換

戦争が進むにつれ、原料や労働力の不足によって当地方の産業は大きな困難にぶつかります。昭和17年（1942年）5月には企業整備令が公布され、政府が中小企業に対して強い法的強制力を持つことになります。これにより、多くの企業が整理統合され、軍需生産への転換が強く進められました。

半田の酒造業界では、食料確保のために原料の米が制限されたため生産が大きく減少し、半数以上の工場が閉鎖されました。中埜酢店は生産高が著しく減少したものの、製酢業界の大手として残ります。

昭和19年（1944年）には、東洋紡績㈱知多工場が工場の全てを中島飛行機に譲渡し、航空機製造工場となりました。また、大日本麦酒㈱半田工場（現在の半田赤レンガ建物）も、企業整備令により昭和19年に全施設を中島飛行機半田製作所に差し出し、資材倉庫として使われることになりました。こうして半田は、中島飛行機を中心に軍需産業一色となっていきました。

酒造業の企業整備実施計画

『新修　半田市誌　中巻』より

製造者		基本石数		合同経営体または転用先
位置	名称	操業分	廃止分	
半田	田中酒造（資）	803	608	
半田	丸中酒造（資）本倉	1,516		
	南倉		1,149	川崎重工㈱　賃貸
阿久比	新美市郎		496	未決
半田	榊原酒醤（資）	575		半田醸造会社（代表：竹内佐一）
半田	竹内佐一	973		
内海	内田七郎兵衛	454		
豊浜	家田半三郎		195	未決
師崎	渡辺嘉平次		386	未決
篠島	藤田平治郎		106	未決

製造者		基本石数		合同経営体または転用先
位置	名称	操業分	廃止分	
亀崎	伊東（資）本倉	1,641		
	大西倉	1,292		
	相生倉		404	大同製鋼㈱　取毀
	中倉		688	
	新居倉		1,129	大同製鋼㈱　取毀
亀崎	太田（資）	704	533	
亀崎	堤酒造㈱　本倉		1,211	所有者へ返付
	出倉		358	
亀崎	吉田酒造（資）		164	
亀崎	稲葉酒造（資）		712	中島飛行機活材工場　賃貸
亀崎	天埜酒造（資）	428		知多酒造会社（代表：天埜栄三）
東浦	原田徳右衛門	543		
東浦	野村定助	430		

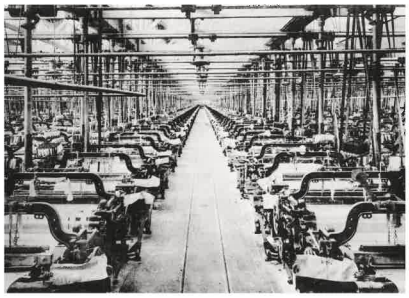
知多紡績から東洋紡績へ

明治29年（1896年）、小栗冨治郎ら半田町の有力者により知多紡績㈱が設立され、明治30年代後半から業績が順調に推移していきました。しかし、大手紡績会社との競争により経営が厳しくなり、明治40年（1907年）に三重紡績㈱に吸収合併されました。さらに、三重紡績㈱も各地との合併を経て規模を拡大しましたが、大正3年（1914年）に大阪紡績㈱と合併し、新会社の東洋紡績㈱が誕生。我が国最大の紡績会社となりました。中でも、知多工場は生産高第2位を誇る重要工場として位置づけられ、発展を遂げました。

大正3年に第一次世界大戦が始まると、日本は大変な好景気となります。半田地域では、東洋紡績知多工場に代表されるように、朝鮮方面からの綿布の大量注文により、工場がフル操業となりました。大正6年（1917年）には、半田町の人口13,791人のうち、知多工場の従業員が3,485人で、全体の4分の1にも達するほどでした。

その後、昭和19年（1944年）に工場の全てが中島飛行機に譲渡され、知多工場は航空機製造工場（中島飛行機半田製作所）となります。

東洋紡績㈱知多工場　全景



東洋紡績㈱知多工場　織機部

8. 戦時下の震災

昭和19年（1944年）12月7日の午後1時36分頃、紀伊半島東部熊野灘沖を震源地とするマグニチュード7.9の巨大地震「昭和東南海地震」が発生しました。愛知・三重・静岡で特に被害が大きく、全体で死者・行方不明者1,223人、家屋全壊17,599戸にのぼりました。半田市では、干拓地である山方・亀洲・康衛新田の家屋をはじめ、亀崎の望州楼百畳の間や稲葉酒造倉など各地で建物が倒壊し、180名以上の犠牲者を出しました。特に、中島飛行機半田製作所の山方工場と葭野工場の倒壊により153名（うち96名は勤労動員学徒）が犠牲となりました。

さらに、昭和東南海地震の発生から37日後、昭和20年（1945年）1月13日の午前3時38分頃、三河湾でマグニチュード6.8の直下型地震「三河地震」が発生しました。地震規模の割に被害が大きく、全体で死者2,306人、家屋全壊7,221戸にのぼりました。愛知県下では、幡豆郡全域と碧海郡南部に被害が集中しています。半田市の被害は死者12人、家屋の全半壊450戸余りでした。

これら二つの震災は、戦時下の厳しい報道管制のため、被害の状況がほとんど報道されませんでした。

昭和東南海地震による半田市内の被害状況

稲葉酒造付近（亀崎字越前）

望洲楼百畳の間（亀崎町）

海蔵寺（乙川若宮町）

山方新田・源兵衛橋方面を望む（源平町）

中埜酢店本倉（源平町）

半田第一国民学校作法室（勘内町）

昭和東南海地震による半田市の被害

総戸数		10,729 戸
住 家	全 壊	800 戸
	半 壊	497 戸
非住家	全 壊	273 戸
	半 壊	222 戸
死 者		188 人
負傷者		286 人

愛知県防災会議『昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布』より

震災に際して

半田市長　中埜半左衛門

前項七日突如當地方に來襲せし激震は安政以來の震災にて家屋の倒潰、半潰多數に上り、而も若干の犠牲者を生ぜしは誠だ遺憾の極みである然るに此報傳はるや本縣當局を始め各方面より熊々來訪の上慰問金を寄贈せられ又篤志家及び隣保班等より罹災義捐金として淨財を贈られたるは感謝措く能はざる處である、翻して本市民は此震災を天與の試練として擧市發憤復興に專念すると共に愈々職力增强に邁進する覺悟を新にし各自職域に一段の努力を要望し已まぬ所である、茲に紙上を以て今次震災に御同情を賜せられたる各位に對し深甚なる謝意を表する次第である。

半田市公報　第63号（昭和20年）

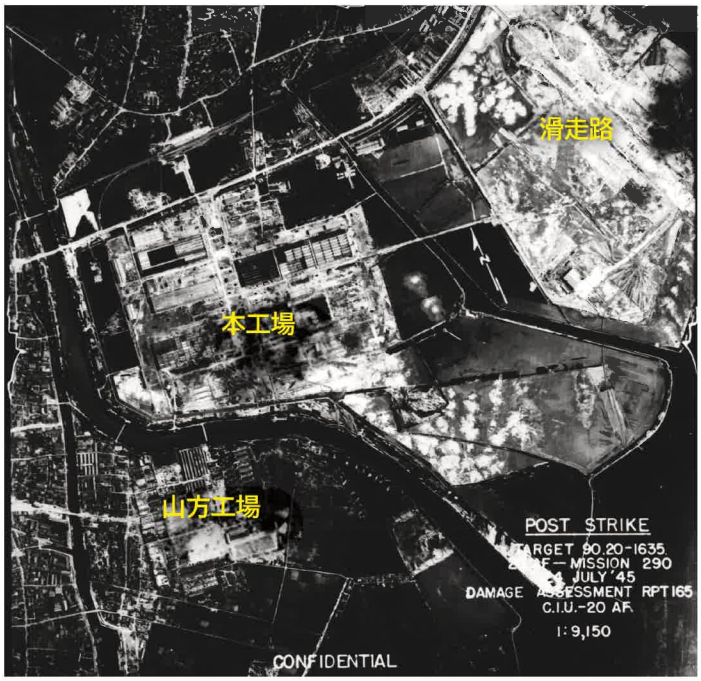
標柱「東南海地震被災の地」（半田市役所）

9. 半田空襲

昭和20年（1945年）7月15日、硫黄島から進発してきた十数機の P-51 小型戦闘機により、半田市への本格的な初空襲が行われました。超低空飛行での攻撃が繰り返され、市内とその周辺に機銃掃射が浴びせられました。その際、中島飛行機半田製作所の衣糧倉庫として使われていた大日本麦酒㈱半田工場（現在の半田赤レンガ建物）は、機銃掃射によって火災が発生し、一部が焼失する被害もありました。現在も、半田赤レンガ建物のレンガ壁には、機銃弾の当たった跡が多数残されています。

さらに、同年7月24日には半田市を攻撃目標とした大規模な爆撃がありました。B-29 大型爆撃機78機により、250キロ爆弾2,149発、1トン爆弾7発が投下されました。その後、グラマン・P-51・P-38などの戦闘機が機銃掃射を浴びせて死傷者を増大させ、264人以上が犠牲となりました。また、この空襲の主目的であった中島飛行機半田製作所は、本工場へ81発、山方工場へ35発の爆弾が投下されて壊滅的な被害を受け、事実上生産が停止となりました。

この“半田空襲”から1か月も経たない昭和20年（1945年）8月15日、日本は終戦を迎えます。



7月24日の空襲後に撮影された中島飛行機半田製作所航空写真
米国戦略爆撃調査団文書（国立国会図書館デジタルコレクションより）

米軍の空爆で破壊された中島飛行機半田製作所本工場
提供：半田空襲と戦争を記録する会

半田赤レンガ建物の弾痕壁

半田・戦災犠牲者一覧表　『半田の戦争記録　第三集』より

	地震	空襲	労災	合計
学 徒	97	21	5	123
徴用者	17	12	0	29
挺身隊	3	14	0	17
従業員	37	29	0	66
朝鮮人労働者		※注2 59	1	60
一般市民		145		145
合 計	※注1 154	280	6	440

※注1　地震の犠牲者数は軍需工場分のみ。ほか、住宅地で34人が死亡。
※注2　徴用青年48人を含む。

空襲体験の証言

あのときはとにかくすごかったがな。爆弾が雨ぐらい降りよった。田んぼや家の裏の運河の船だまりにもぎょうさん落ちての。船が一艘のこらずやられての、機械が陸の上に放り出されとったに。

『半田の戦争記録』より

10. 戦禍をこえて

焼け野原となった国内では、衣・食・住のすべてで足りない物ばかりでした。半田もその例外ではなく、市民の生活は極めて苦しいものでした。

軍需生産の中心だった中島飛行機半田製作所は、戦後いち早く富士産業㈱と社名を改め、軍需産業から平和産業へと転換します。しかし、財閥解体の対象となった富士産業㈱は解体され、昭和28年（1953年）に輸送機工業㈱と社名を改め、再建されました。また、敗戦直後、半田の繊維工業はとても苦しい状態でしたが、戦後復興期の激しい動きのなか、目覚ましい勢いで生産が回復していきます。繊維工業と並ぶ地場産業である醸造業も、原料不足などの条件に制約されながらも、次第に復興していきました。

そして、昭和30年代以降、日本の高度経済成長と時を同じくして、半田は大きく飛躍していきます。臨海工業地帯への工場誘致をはじめ、愛知用水を活用した産業の発展や交通網の充実など、知多半島の政治・経済・文化の中心都市として、伝統が生きる近代的な街づくりを目指し、着実に歩み始めていきます。

銀座本町の様子（昭和25年頃）

半田競艇（昭和28年）

衣浦大橋開通（昭和31年）

愛知用水完成（昭和36年）

知多半島道路全線開通（昭和46年）

衣浦海底トンネル開通（昭和48年）

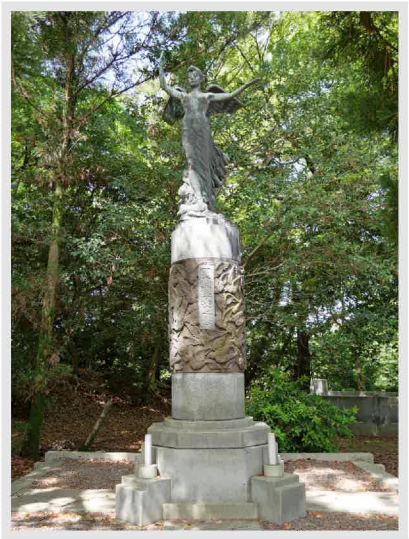
戦争に関する資料を集めています

博物館では、戦時下のくらしの様子を伝える資料や軍装品・軍隊生活用品などの戦争関係資料を収集しています。これらの貴重な資料を大切に保存するとともに、展示や教育普及活動を通じて、当時の記録や記憶を後世へ伝えていきます。

資料をご寄贈いただける方は、ぜひ博物館までご連絡ください。

※収集している資料の例

生活道具、写真、ポスター、ちらし、新聞、雑誌、債券、保険証券、配給書類、日記、軍事郵便はがき、教科書、おもちゃ、軍服、勲章、召集令状、軍隊手帳、千人針、中島飛行機半田製作所関係資料　など



殉難学徒之像（雁宿公園）

編集／発行　半田市立博物館
〒475-0928　愛知県半田市桐ヶ丘4丁目 209 番地の1
TEL：0569-23-7173　E-mail：hkbutsu@city.handa.lg.jp
発　行　日　令和7年（2025年）6月
印　　刷　半田中央印刷株式会社